教育通信 No,13

目の前の生徒を理解し、
その子に必要な働きかけをする
それが授業の核心である

～個別最適な学びって？～

高橋先生が行っていた自由進度学習（個別最適な学び）について、もう少しだけ深掘りしたいと思います。

そもそも、言葉の説明ですが「自由進度学習とは、児童・生徒自身が学習計画を立て、自分のペースで学習を進める方法。教員は学習材や環境を整え、児童・生徒の自律的な学びをサポートする。」という授業スタイルのことを指しています。

高橋先生の自由進度学習が形となり、授業として成功しているのは今年で３年目となり、生徒自身がやり方をわかっていることが一番の成功理由となっています。

ただ、そんなことを言ってしまうと「結局積み重ねやんけ！」となってしまいます。

では、『自由進度学習』を成立させるうえで、他にいったいどんなことが必要となるのでしょうか？これがすべて！とは言いませんがうすき的分析によると主に３つの要素が必要にあると思います。

①教師の立ち位置
②教材準備の時間確保
③学年との相性

大きくはこの３つかな？と思います。高橋先生の授業を紹介した際に②教材準備の時間確保の工夫については紹介しましたので、今回の通信では①教師の立ち位置、②学年との相性という観点から見てみましょう。

①教師の立ち位置について

自分が授業をするからには生徒に力をつけてほしい、と思うのは当たり前のことです。また、生徒の学力を上げる、力をつけさせることが授業者の責務である、という考え方もあります。その点からいうと「自由進度学習」とは、授業者の手から離れ自分で勉強するスタイルなので授業者が不安に陥ってしまいます。

しかし、ここで抑えるべきポイントは『一斉授業をしたからと言って、学力が上がるわけではない』ということ。また、『自由進度学習とは、ほったらかし授業ではない』ということです。

授業者が１０教えたとしても、１しか吸収できないひともいれば、１０吸収できる人もいます。それは人それぞれで、１０を知っている人が１０教えたとしても吸収できる量は人によって変わってきます。

ただ、『ラーニングピラミッド』という学習定着率のピラミッドがあるように、講義では５％、人に教えることで９０％の定着率があるということが研究でわかっています。そういった点から「教師がすべて教える」という授業は、今の時代ではある一定の効果はあったとしても限界がある、ということです。

もう一つに挙げた『自由進度学習とは、ほったらかし授業ではない』という点ですが、自由進度学習は自分のレベルに合った問題を選ぶことができるとはいえ、壁にぶつかることがあります。そこに対して、「自分で対応する力がいるから」と言ってほったらかしてしまうと、その生徒が次に進める（別の手段をとって問題を理解することができる）かはわかりません。

むしろ大事なことは、『教師は生徒のつまづきにいち早く気づき、すぐに対処する』ということです。ここでいう「対処」というのは、「答えを教師が教える」ということではなく、「解き方がわかっている生徒を教師がその子に教える」ということです。教師が生徒と生徒をつなぐファシリテーターとなる、ということです。

もし一人がつまづいているなら教師一人でも教えることができます。しかし、それが１０人いてしまうと、その時点で学びが止まってしまうのです。その学びを止めないように、教師が全体を把握し、つまづいている子に対してすぐさま対処する。

つまり、「自由進度学習」を成り立たせるうえで大切なことは「教師のファシリテーターとしての立ち回り」があってこそ、生徒が教材と向き合い、学びが深まる、と言えます。

③学年との相性について

学力などについて記載しており、個人情報の観点から空白としています。

～そもそもなぜ個別最適な学び？～

そもそも、今なぜ「個別最適な学び」と言われるようになったのでしょうか。

かつての学校教育では、一斉授業、いわゆる「教師発話中心のチョーク&トーク」が主流でした。全ての児童生徒に、同じ内容（知識）を効率よく定着させることが重要だったからです。

しかし、社会の急速な変化や、正解のない課題の増加を背景に、知識をただ受け取るだけでは対応が難しくなりました。そこで「生きる力」の育成が求められるようになりました。 2000年代以降、学習者が主体的に考え、人と協働して課題解決に向かう「アクティブラーニング」という言葉が生まれ、重視されてきました。

さらに近年、ICTの進展や子どもたちの学びの個人差が顕在化し、従来の画一的な指導では全員の力が十分伸びないことが課題となっています。そのため現在は、一人ひとりに応じて学習を調整しつつ、協働的な学びも組み合わせた「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」を目指す方向へ転換しています。

このように教育は、「一斉指導 → 主体的・対話的な学び → 個別最適な学び（協働的な学びの一体的充実）」と段階的に進化し、現代の子どもたちが将来を切り拓く力を育むことを目的として改革が進んでいます。

～昔と今はなにか違うの？～

では、具体的に昔と今では何がちがうのでしょうか？

皆さんは「また新しい言葉か」と感じたことがあるでしょう。一斉授業、アクティブラーニング、個別最適な学び。教育施策が変わるたびに新しいバズワードが降ってきます。しかし、立ち止まって考えてみてください。私たちが日々教室で実践していることの本質は、本当に変わったのでしょうか。

30年前の名物教師の授業を思い浮かべてください。彼らは何をしていましたか？

- **机間巡視しながら、生徒一人ひとりのノートを見て理解度を把握していた**　**・「なぜそう思う？」と問いかけ、生徒の思考を深めていた**

授業中の反応を見て、説明の仕方を変えていた　・放課後、つまずいている生徒に個別に声をかけていた　・生徒同士で教え合う場面を意図的に作っていた

これは今で言う「個別最適な学び」「対話的な学び」「協働的な学び」そのもの。優れた教師は、用語が存在する前から、本質的にこれらを実践していました。

では何が変わったのか。変わったのは手段と環境です。

昔：教師の個人技に依存

- ベテラン教師の「勘」で個人差を把握　・板書と発問という限られたツール　・授業中の観察のみでデータ蓄積は困難　・個別対応は主に放課後や休み時間

今：システムと技術による支援

- 端末とデジタル教材で個別支援、一斉説明の効率化　・グループワークという構造化された協働学習の手法　・データに基づく個別支援の設計

つまり、優れた教師が暗黙知として持っていた技を、誰もが活用できる「仕組み」にしようとしているのが現在の改革です。

ただ、注意すべき点がたくさんあるから、たくさんの注意点を教えるために専門用語という形で言葉になり、説明される機会が

どんな用語が登場しても、教育の核心は変わりません。**「目の前の生徒を理解し、その子に必要な働きかけをする」**これだけです。